

# 纒縹縁に座る女三宮 高麗縁を降りる冷泉院

——国宝源氏物語絵巻の「畳」に関する二、三の疑問——

森 田 直 美

## 一 はじめに

古典文学にまつわる物語絵を見ると、室内装飾や服飾の色・模様等が、どのように選択され、配置されたのかという点が気にかかる。たとえば、『源氏物語』などは、着衣やしつらいに關して比較的丁寧な描写が散見されるが、室内の隅々、一人ひとりの装束に至るまで、常に詳細に記されているわけではない。よって、絵画に描かれる装束やしつらいは、多くの場合、製作者の意図・意識によつて選択されたものだと言える。本稿では、国宝源氏物語絵巻を対象として、数々のしつらいの中でも、特に「畳」に注目する。

詳しくは後述するが、平安時代当時の畳は一種の身分標識として機能していた。身分の異なる者同士が同じ場を共有する場合、畳の有無、あるいは畳縁の色や模様を使い分けることによつて、身分差を示したのである。この点を念頭に、国宝源氏物語絵巻を見渡すと、畳縁の選択や、人物と畳の配置に疑問を覚える場面がある。その疑問に對して、折々に考えを巡らせてきたが、いまだ理解に窮する点が多い。そこで今回、一度問題点を整理し、現時点での私見を示した上で、今後の課題や展望についてまとめてみたい。

## 二 国宝源氏物語絵巻の「畳」

身分・階級による畳縁の使用基準について詳細に記された文献の早い例として、室町時代の有職書『海人藻芥』<sup>あまのもくず</sup>（応永二七（一四二〇）年成立）がある。同書の「畳之事」には、以下のように記されている。

帝王院纒縹縁也。神仏前半畳用纒縹縁。此外不可用者也、大紋高麗ヲバ親王大臣用之。以下更不可用、大臣以下公卿小紋ノ高麗端也。僧中者僧正以下、同有職非職ハ紫端也。六位侍ハ黄端ナリ。諸寺諸社三綱等皆用黄端云々。四位五位雲客用紫端。

同書によれば、纒縹縁（同書での表記は「纒縹縁」）は天皇・上皇および神仏の前半畳に用い、その他には用いることができない。大紋高麗縁は親王・大臣に、小紋高麗縁は大臣以下の公卿に用いる。そして、僧正などは紫縁、六位侍などは黄縁といった序列がある。

同書の成立は、『源氏物語』の成立期とは四百年余、国宝源氏物語絵巻の成立期とも二百年前後の開きがある。そのため、平安期における畳縁の使用基準を考えるにあたっては、一つの参考と見る他ない。実際、平安時代の古記録類を見ると、例えば纒縹縁の使

用は必ずしも天皇・上皇に限定されていない。よって本稿では、あくまで国宝源氏物語絵巻の内部で、畳縁がどのように意識され、描き分けられているのかを確認し、同時代以降の古記録類と照らし合わせながら検討を進めたい。

さて、現存する国宝源氏物語絵巻の絵画部分二十場面（徳川・五島本十九場面、東博本一場面）のうち、畳が描かれているのは以下の十七場面である。

- ・ 柏木一、二、三
- ・ 横笛
- ・ 鈴虫一、二
- ・ 夕霧
- ・ 御法
- ・ 竹河一、二



- ・ 橘姫
- ・ 早蕨
- ・ 宿木一、二、三
- ・ 東屋一、二

また、当絵巻に確認できる畳縁は、縹縹縁、大紋高麗縁、小紋高麗縁の三種である。そして各場面を概観すると、やはり畳は身分標識として意識され、描き分けられていることがうかがえる。まず、その点が顕著に表れている宿木一を挙げる。

この場面には、今上帝と薫が碁を打

つ様子が描かれている。三番勝負に勝利した薫に、帝が女二宮の降嫁をほのめかすくだりである。碁盤を挟み、奥側の帝は、大紋高麗縁の上に重ねた縹縹縁に座っている。手前側の薫は、画面から見切れているため判然としないが、大紋高麗縁からも身を外し、板敷に座っているように見える。帝が最も格の高い縹縹縁に座るのは、前掲した『海人藻芥』の記述に合致しているが、中納言たる薫が板敷に座るのは、帝への遠慮を表現しているのだろうか。なお、障子を隔てて画面左側にいる二人の女房が座っている場も板敷である。では次に、宿木二を挙げる。



当場面は、匂宮と夕霧の六の君の、三日夜の翌朝が描かれている。画面右、縹縹縁の上には龍鬘筵りゅうまのひしろうが敷かれている。そこに座しているのは匂宮と六の君である。龍鬘筵とは、五彩に染めた細葛はこいで織った筵である。『後二条師通記』寛治三（一〇八九）年正月五日条、堀河天皇御元服の記事に、「南殿御装束次第如記文、御張下敷縹縹端畳二枚、其上敷土敷一枚」とあり、「土敷一枚」の割注に「龍鬘筵」と、縹縹縁の畳に重ねて使用したという記載がある。こうした記事から、晴れの儀に相応しい華やかなしつらいとして描かれたことが窺える。左に控えている女房たちは、小紋高麗縁に座り、二人との身分差が表されている。さらに、柏木三も確認したい。



当場面には御五十日の祝いの席で、

実子ではない薫を抱く光源氏が描かれている。その光源氏が座るのは、廂に敷かれた縹緗縁である。傍らには、祝いの膳が据えられている。手前に控える女房たちの畳縁は見えない。また、左上には几帳の裾が描かれ、その奥に女三宮の存在が暗示されていると考えられる。描かれていない部分は確定しにくいが見えている畳の配置からして、几帳の向こうにいる女三宮も、縹緗縁に座っていると推察される。

御五十日の祝いに使用された畳の記録として、『康平記』康平五年（一〇六

二）年十一月二日の記述は貴重である（（）内は割注）。

若君御五十日也。於東三条東対有此事矣。（去夕渡御也）。西庇設御座（敷縹緗端二枚。其上敷地敷茵立廻御屏風。雖有可立御調度之儀。殿下仰不立由云々）。

内大臣・藤原師実の子、師通の御五十日にあたり、廂に御座を設け、そこに縹緗縁を敷くのは、宿木三に共通している。

以上の三つの場面から、国宝源氏物語絵巻内での畳の使用について、次の三点が読み取れる。

・縹緗縁に座る人物は、皇族やそれに准じる者（六の君は匂宮と一対）に限られている。

・宿木一、二から、畳の有無や畳縁の別によって、人物たちの身

分的序列を表現しようという意識が窺える。

・宿木二、柏木三から察するに、当絵巻の畳の描かれ方には、平安中後期の実情が反映されている。

### 三 高麗縁から身を外す冷泉院

さて、三つの場面を通して、国宝源氏物語絵巻における畳の扱われ方をおさえてきた。では以下、畳の描かれ方に疑問を覚える場面を挙げ、考えるところを記したい。まず、鈴虫二を見ていく。

これは、八月十五夜の夜、六条院で管絃の宴を催していた光源氏や夕霧たちが、冷泉院からの消息を受け、院のもとへ参上した場面である。画面右上には煌々と輝く月が描かれ、簀子では夕霧や蛸宮たちが楽を奏している。<sup>2)</sup>



さて、この場面に描かれる畳は大紋高麗縁のみである。柱を背に座っている光源氏と、向かい合わせて座る冷泉院の座として、大紋高麗縁が描かれている。画面左下の蛸宮は、判然としないうが、源氏と同じ大紋高麗縁に座っているだろうか。<sup>3)</sup> プライベートの気軽な訪問の場で、縹緗縁は使用されていないものの、廂と簀子で場を分け、さらに冷泉院はより母屋に近い側に座すこ

ただし、ここで注意したいのは、冷泉院が源氏ににじり寄るように畳から身を外し、板敷の上に描かれていることである。本来は、冷泉院も背後に敷かれている畳に深く座して源氏に対峙するべきところだろう。それがあえて、身を乗り出すようにして、板敷の上に描かれている。この描き方には、製作者の意図を読み取るべきではないだろうか。

ここに表されているのは、実父に親しみ寄ろうとする冷泉院の愛情だけではないだろう。おそらく、自らは板敷へ降り、源氏に礼を尽くそうとする孝心をも、表現しているのではないだろうか。ここで思い出したいのは、藤裏葉巻の六条院行幸において語られた、冷泉帝の心情である。

山の紅葉いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覽せさせたまふ。御座二つよそひて、主の御座は下れるを、宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝はなほ限りあるみやゐやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなん思しける。

西の御前（秋好中宮の御殿）の紅葉を眺めるために座が用意された際、冷泉帝と朱雀院の御座は二つ並べて、光源氏の御座は一段下げて設けられた。しかし、冷泉帝は同列に直すよう宣旨を下している。光源氏にとっては光栄な配慮だが、冷泉帝の心は満たされていない。公の場で源氏に見せられる孝心には限界があり、実父に対して、礼節を尽くしきれないことを無念に思っている。

鈴虫巻では、冷泉帝はすでに退位し、しかも鈴虫二はブライベートな集いの場面である。高麗縁から身を外す冷泉院の姿から、周囲の目を気にすることなく源氏に礼節を尽くそうとする心情を、見て

取ることができるのではないだろうか。

#### 四 縹縹縁に座る女三宮

次に、柏木一を挙げる。畳を視座として国宝源氏物語絵巻を概観し、もつとも疑問に思われるのはこの場面である。

当場面には、薫の出産後、光源氏との関係性を苦として出家を望んだ女三宮と、その報を受け、矢も楯もたまらず六条院を訪問した朱雀院の様子が描かれている。そして畳に注目すると、源氏と朱雀院が座るのは、大紋高麗縁である。一方、画面左の女三宮は二枚重ねて高さを出した縹縹縁に座っている。この場面で、女三宮だけが一段高い縹縹縁を使用しているのはなぜなのだろうか。



一段下がった高麗縁に座していることである。公の場ではなく、私邸での一幕ではあるが、結果として三人は畳によって序列化されているように見える。

当場面を描く際、女三宮の畳を高麗縁とすることも出来ただろうし、朱雀院や源氏の畳を縹緗縁として、女三宮に合わせることも出来ただろう。では、この描き分けから、鑑賞者である私たちは、何を読み取るべきなのだろうか。

この点については、いまだ確固たる見解に至っていないが、以下に、現時点で考えている三つの可能性を示したい。

### (1) 物語展開を反映している

当場面に相当する詞書には、以下の叙述がある。

「かたはら痛き御座なれども」とて、御帳の前に、御褥まゐりて入れたてまつりたまふ。宮をも、とかう人々つくるひきこえて、床の下におろしたてまつる。

源氏は、朱雀院の突然の来訪に恐縮しつつ、御帳台の前に褥を整えて招き入れた。そして、女房たちは女三宮を御帳台の浜床の下におろしている。

柏木一には、朱雀院が座っている背後に褥の一部が見え、画面の左上に見切れる形で御帳台も描かれている。これらから、詞書が画面の構成にしっかりと反映されていることがうかがえる。この点に鑑みると、朱雀院の来訪があまりに急だったため、十分なしつらいを整えられなかったことが、畳の割当てにも表れていると見ることができないのではないだろうか。

### (2) 皇女を描く際の定型

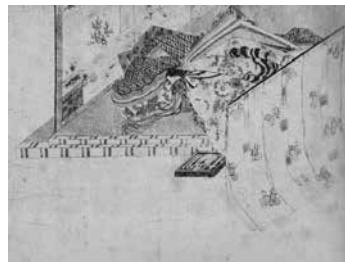
国宝源氏物語絵巻とはほぼ同時代の作例と推定される作品に、佐竹本三十六歌仙絵がある。この歌仙絵における斎宮女御は、柏木一の

女三宮の描かれ方を考える手がかりとなる。

斎宮女御は、二段重ねの縹緗縁を敷き、几帳の影に座っている。

こうした作例から察するに、当時、皇族女性は几帳に囲まれ、縹緗縁に座るのが、絵画化する際の定型であつた可能性が想定される。

ただしその場合も、光源氏と朱雀院の座を縹緗縁とすれば、畳による三人の序列を解消することは可能である。よって、俎上に乗せた疑問をこの見解によって払拭することはできない。



### (3) 源氏と女三宮の身分的位置づけの難しさ

柏木巻において、光源氏は既に「太上天皇にならずらふ御位」を得ているが、史上に例のない位であるために位置づけが難しい。はたして、女三宮と源氏の身分的序列は、どう考えるべきなのだろうか。「太上天皇にならずらふ御位」の位置づけについては、先行研究においても様々に論じられている。たとえば、加藤洋介氏は、これを「准三宮」のような措置ではなかったかと論じた。すなわち、身位が飛躍的に上昇したわけではなく、あくまで臣下として、太上天皇と同等の御封・年官・年爵を賜つたのではないかという見解である。ただし、前掲した藤裏葉巻での御座の措置など、光源氏は公の場で太上天皇に等しい待遇を与えられている。園明美氏は、こうした点に注目し、源氏の身位について、

人臣の列を離れたものであるが、それは源氏個人・一代限りのものであり、ここに「ただ人」にして「准太上天皇」であるという特殊事情が反映しているのではないか。

との見方を示した。

光源氏の身位、「太上天皇にならずらふ」とは、具体的にどのような待遇を指すのかを、物語内の描写から明確にすることは難しい。ただ、物語の要請による特殊な身分が、現実社会からかけ離れた荒唐無稽なものにならないよう、注意深く形作られていると言うことはできよう。

さて、准太上天皇の位置づけの難しさは、そのまま光源氏と女三宮との結婚の在り方を考える難しさにつながる。現在一般的に、女三宮は光源氏のもとに「降嫁した」と称される場合が多いが、この結婚がいわゆる「降嫁」にあたるのかどうか、今少し慎重に考える必要がある。土居奈生子氏は、この点について、史実と物語描写とを詳細に検討し、「光源氏と女三宮の結婚は、「降嫁」の形態というよりも、「入内」や「参院」の側に属するもの」と位置づけた。また、婚姻にあたって光源氏が示した卑下の態度や、女三宮が六条院の寝殿に居住すること、婚姻後に二品に叙せられることなどを踏まえ、「この結婚は六条院の外側では「入内」が意識され、内側では「降嫁」が意識されているという見方もなりたつ」とした。

土居氏が指摘した、「光源氏が女三宮に示した卑下の態度」とは、若菜上巻の以下の場面である。

内裏に参りたまふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡りたまふ儀式いへばさらなり。御送りに、上達部などあまた参りたまふ。かの家司望みたまひし大納言も、やす

からず思ひながらさぶらひたまふ。御車寄せたる所に、院渡りたまひて、おろしたてまつりたまふなども、例には違ひたるところどもなり。ただ人におはすれば、よろづのこと限りありて、内裏参りにも似ず、婿の大君といはむにも事違ひて、めづらしき御仲のあはひどもになむ。

女三宮の六条院渡りに際して、「御車寄せたる所に、院渡りたまひて、おろしたてまつりたまふ」とある。また、「ただ人におはすれば」と、源氏が臣籍に下つたままであることも明記し、この婚姻を「めづらしき御仲」としている。この場面については、早く『河海抄』に、次のような指摘がある。

臣下の礼は妻を迎時は身つから車を寄る礼也云々  
院中の義には此儀あるへからざる歟然而六条院た、人のことく  
ふるまひて卑下し給よし歟

このような場面から源氏と女三宮の身分的序列を推し量ると、六条院内部の論理では、「朱雀院鍾愛の内親王」たる女三宮と、「太上天皇にならずらふ」待遇を受ける源氏は、同等、あるいは女三宮の方が上と捉えられる可能性があるのだろうか。

国宝源氏物語絵巻の柏木一において、縹緗縁に座る女三宮と、その傍らで高麗縁に座る光源氏を見ていると、改めて二人の身分関係が非常に複雑であることを考えさせられる。しかしながら、絵巻の鑑賞者にそれを感じ取らせることが、量の選択理由だと考えるのは、やはり深読みが過ぎるようにも思う。なおかつ、女三宮の父親である朱雀院も高麗縁に座る理由は、この見解では説明できない。

以上、挙げてきた三つの可能性の他に、国宝源氏物語絵巻が製作

された鎌倉初期の畳縁の使用が、それほど厳密ではなかった可能性も考えられる。また前述した通り、当絵巻には、畳を身分標識として用いる意識が見えるものの、それがどれほど厳格なものか、現存する場面だけでは判断できない。

## 五 結びに代えて―鈴虫一の畳―

国宝源氏物語絵巻における畳と人物の配置から生じた疑問と、それに対する私見を示してきた。ただし柏木三については、納得のいく見解に達しておらず、これまでの思索の軌跡を披露したに過ぎない。大方の御教示を待ちつつ、今後とも検討を重ねる所存である。

最後に、鈴虫一に描かれている人物と畳について、わずかながら考えるところを記し、結びに代えたい。

現在、当場面の柱の陰にいる女性が、女三宮であるのか、女房であるのか、一つの争点となっている。その発端は、平成復元模写の過程で、この女性が裳を着用していると判明したことである。裳の着用をもって、これを女房とする説が呈されたが<sup>8)</sup>、裳を着用しているも女三宮と見て差し支えないという反論もあり<sup>9)</sup>、いまだ決着をみない。

筆者は、この女性が誰なのかを見極める一要素として、畳を検討材料に加えることができるのではないかと考える



ている。現存する場面では、柏木一、柏木三(画面外に暗示される形ではあるが)と、女三宮は常に縹欄縁に座している。鈴虫巻では、すでに出家の身ではあるが、その女三宮を板敷に座らせることは、他の場面に比して考えにくい。

興味深いことに、昭和復元模写では、柱の陰の女性は高麗縁の畳に座し、平成復元模写では板敷に座っている<sup>10)</sup>。このいずれが原本を正確に復元しているのだろうか。その答えによって、女性の身分的位置づけは変化するだろう。すなわち、この女性が板敷に座しているのであれば、女房である可能性が高まるのではないかと考えるのである。

## 資料出典

- ・新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)
- ・大日本古記録『後二條師通記上』(岩波書店、一九五六年)
- ・『康平記』(早稲田大学文化資源データベース(天保十四年平田職字写))
- ・玉上琢弥編『紫名抄・河海抄』(角川書店、一九六八年)
- ・佐竹本三十六歌仙絵・斎宮女御の画像は、『名画を切り、名器を継ぐ』図録(根津美術館、二〇一四年)より転載。
- ・国宝源氏物語絵巻の画像(原本、復元模写)は、すべて『開館五十年周年記念特別展 国宝源氏物語絵巻』図録(五島美術館、二〇一〇年)より転載。

## 注

- (1) 堀河天皇御元服の際は、この上に「又其上敷茵一枚東京錦」とある。『御堂関白記』長元四年十二月四日条の敦良親王御読書始や、寛仁二(一〇一八)年正月三日の敦成親王御元服などにも、縹欄縁の畳、土敷、茵を重ねて使用したという記事が見える。よって、宿木二では見えていな

いが、龍髭筵の上には茵が敷かれているという想定なのかもしれない。

- (2) 佐野みどり氏『じっくり見たい源氏物語絵巻』(小学館、二〇〇〇年)は、笛を吹いている男性を夕霧と見ている。また佐野氏は、物語本文では、男性たちが楽を奏するのは、冷泉院のもとに向かう車中で、絵画化する際に場面が再構成されたと捉えている。一方、清水婦久子氏『国宝「源氏物語絵巻」を読む』(和泉書院、二〇一一年)は、この場面を必ずしも異時同図と見る必要はないとしている。

- (3) 三田村明、三田村雅子著「鈴虫(二)」を読み解く『源氏物語絵巻の謎を読み解く』所収、角川書店、一九九八年)では、冷泉院と光源氏は畳二枚(もしくは一枚)、蛭宮は畳一枚(もしくは無し)と見ている。

- (4) 青木慎一氏「鈴虫第二段―罪の承譜を暴く夕霧―」『源氏物語の表現と絵画的展開―夕霧を中心に』所収、武蔵野書院、二〇一九年)では、「畳の縁を越えんばかりに近づこうとする冷泉院」と見ているが、描かれている位置からして、冷泉院の体は板敷上にあると見える。

- (5) 加藤洋介氏「経済・貨幣―「准太上天皇」光源氏の封戸をめぐる―」(物語研究会編『物語とメディア』所収、有精堂、一九九三年)。

- (6) 園明美氏「太上天皇になずらふ御位得たまうて―」『准太上天皇』光源氏の身位と歴史との繋がりめぐって―(『論叢 源氏物語 2 歴史との往還』所収、新典社、二〇〇〇年)。

- (7) 土居奈生子氏「准太上天皇」の結婚―「女三宮の降嫁」再検討―(『名古屋大学国語国文学』第八三号、一九九八年、一二月)。

- (8) 四辻秀紀氏「国宝「源氏物語絵巻」について」(『開館五十周年記念特別展 国宝源氏物語絵巻』図録所収、五島美術館、二〇一〇年)は、裳の着用に加え、髪の手ぎりなども考慮し、柱の陰の女性は女三宮に伺候する女房だろうとしている。

- (9) 徳原茂実氏「裳を着けた女三の宮―源氏物語絵巻「鈴虫」試論」(『武庫川国文』第六九号、二〇〇七年二月)など。

- (10) 『開館五十周年記念特別展 国宝源氏物語絵巻』図録(五島美術館、二〇一〇年)の八七頁に、昭和三十八(一九六三)年復元模写と、平成十七(二〇〇五)年復元模写が併せて提示されている。

#### 〔付記〕

本稿執筆に際し、河田昌之氏、赤澤真理氏より、多くご教示を賜った。末尾ながら、厚く御礼申し上げる。